

法華寺阿弥陀浄土院跡の調査

—第512次

1 はじめに

本調査は奈良市法華寺町における個人住宅建設にともなう発掘調査である。調査地は、阿弥陀浄土院跡とされる平城京左京二条二坊十坪の北東部にあたり、法華寺中心伽藍中軸線と東二坊坊間東小路の間に位置する（図Ⅲ-44）。同坪における既調査としては、坪の北西隅で第80次調査および坪の北半中央付近で第183-21・282-6次調査がおこなわれており、いずれにおいても掘立柱建物跡等が見つかっている。また、坪の南半でおこなわれた第312次調査では、護岸や石敷などの園池遺構を確認しており、当坪が阿弥陀浄土院であることが確実となった¹⁾。

今回の調査地では、南北4m、東西9mの調査区を設定した。調査は2013年4月8日に着手し、4月11日に終了した。

2 基本層序

厚さ約90cmの現代造成土および埋立土の下に旧耕土約30cm、砂礫混灰色粘土の遺物包含層約30cmが堆積し、その下が黄灰色砂質土の地山で、地山上面で遺構を検出した。地山は西から東に向かって下がり、調査区の西端では標高約62.7m、東端では標高約62.4mとなる。

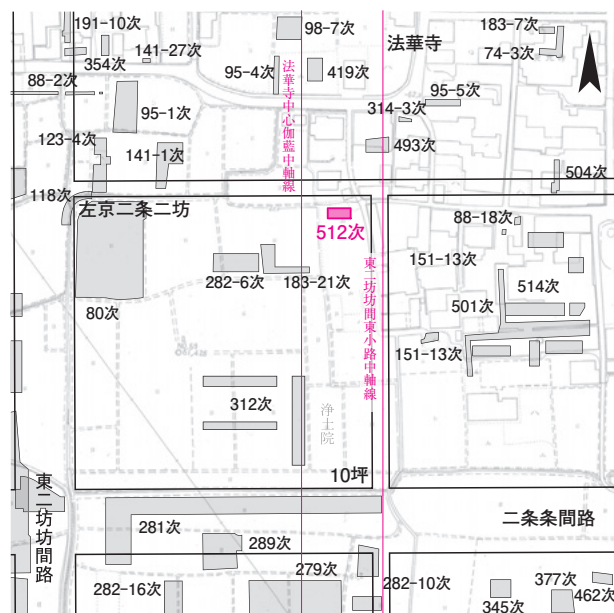
3 検出遺構

柱穴SP10475 調査区南東隅で柱穴1基を検出した。柱掘方は一辺70～80cm、深さ約60cmで、長径約70cm、深さ約50cmの柱抜取穴が認められた。調査区内ではこれ以外に柱穴は確認していないので、調査区外の東方・南方へ建物が展開すると考えられる。出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

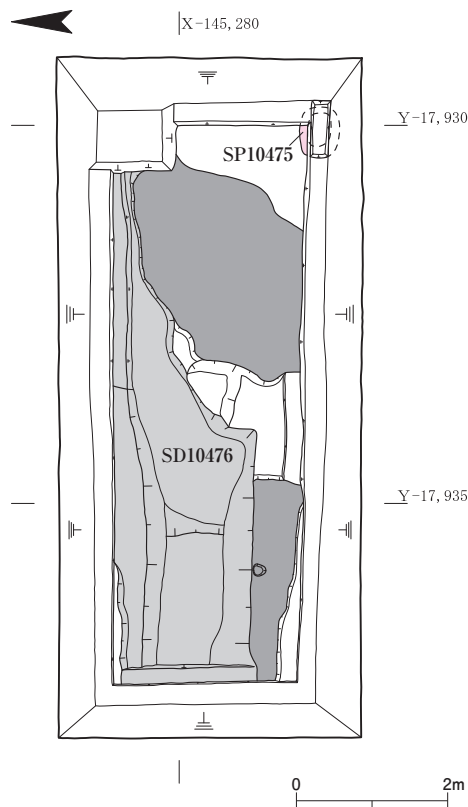
東西溝SD10476 長さ約9mにわたり幅約1.4mの東西溝を確認した。この溝は、出土遺物から近世の流路とみられる。
(松下迪生)

4 出土遺物

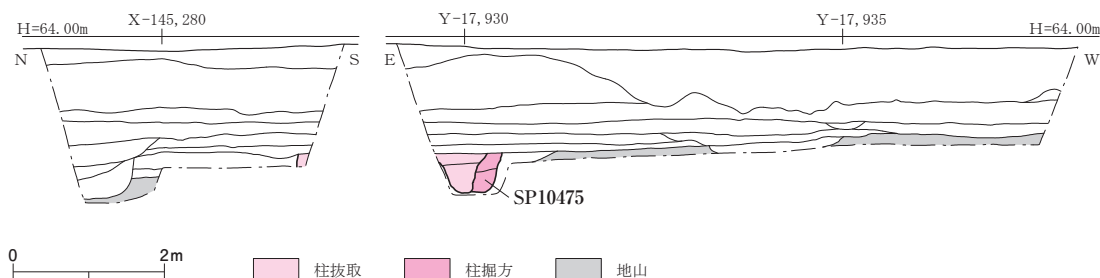
土器・土製品 奈良時代の須恵器少量と室町時代後半の土器類が多数出土した。奈良時代の土器としては、柱



図Ⅲ-44 第512次調査区位置図 1 : 3000



図Ⅲ-45 第512次調査遺構平面図 1 : 100



図Ⅲ-46 第512次調査東壁・南壁土層断面図 1 : 100

穴SP10475から転用硯の杯B蓋が1点出土している。
東西溝SD10476からは室町時代後半の播鉢を含む瓦質土器、大和H型・I型の土釜が比較的まとまって出土し、赤土器・白土器も若干含む。上層の遺物包含層からは江戸時代の灯明皿や染付け等が出土しており、第514次調査とあわせ、法華寺町の集落が室町時代後半には形成されていた可能性を示唆するものといえよう。(神野 恵)
瓦磚類 第512次調査出土の瓦磚類を表Ⅲ-4に示す。軒瓦は6225A、6311Ba、6320Abと中世の巴文軒丸瓦が1点ずつ出土した。奈良時代の軒丸瓦はいずれも東西溝SD10476最上部からの出土である。軒平瓦は出土していない。その他に三彩の丸瓦が1点出土した。

6225Aは平城瓦編年のⅡ-1期。図Ⅲ-47、1の6311BaはⅡ-1期で、法華寺旧境内に南面し、平城宮東院と北西隅を接する左京二条二坊十一坪からまとまって出土しており、ほかにも朝集殿や内裏地区などからの出土も知られる。同図2の6320AbはⅡ-2期で、これまでも法華寺旧境内における調査で数点が出土している。

(川畑 純)

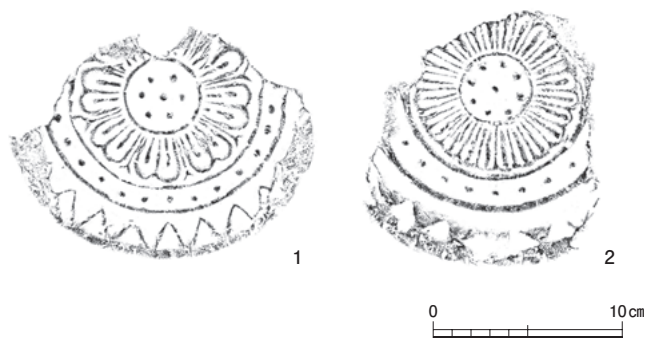
5 ま と め

本調査では柱穴1基のみを検出したにとどまるが、奈良時代の遺構が残っていることが確認できた。周辺では宅地化が急速に進行しているが、阿弥陀浄土院の様相をあきらかにするために、今後も当該坪において調査を積み重ねていく必要がある。

(松下)

註

1) 「法華寺阿弥陀浄土院の調査—第312次」『年報2000—Ⅲ』。



図Ⅲ-47 第512次調査出土瓦 1 : 4

表Ⅲ-4 第512次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			その他	
型式	種	点数	種類	点数
6225	A	1	丸瓦(三彩)	1
6311	Ba	1		
6320	Ab	1		
巴(中世)		1		
軒丸瓦計		4	その他計	1
丸瓦		平瓦	磚	
重量	12.135kg	35.654kg	0	
点数	74	229	0	